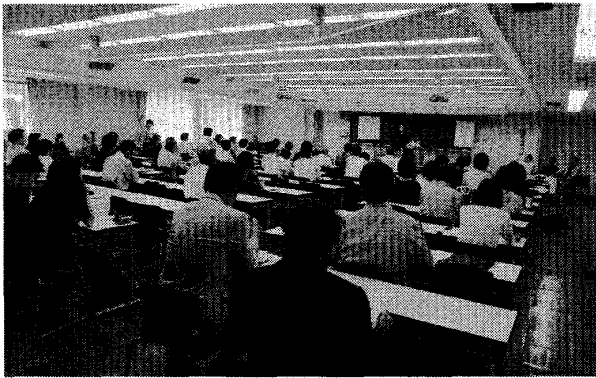


岡村文庫オープニング記念講演会の記録

—岡村春彦氏のご挨拶、暮尾淳氏のご講演ほか—

文責 比留間 洋一

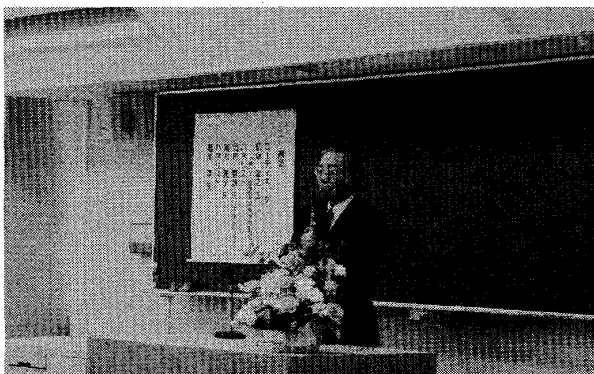


本稿は、2008年5月23日(金)、本学において開催された、「静岡県立大学附属図書館『岡村文庫』オープニング記念式典・講演会—国際報道写真家 岡村昭彦が書物に託した未来—」の録音テープを起こし、まとめたものである。テープ起こしは学生アルバイト、とりまとめは比留間が担当した。写真は望月良憲氏(フォトジャーナリスト

集団「epf」所属。静岡県立大学大学院国際関係学研究科研究生)が撮影した。記念式典・講演会ポスター、「岡村文庫」については以下のURLを参照いただければ幸いである。

http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/library/okamura_bunko/index.html

学長あいさつ



西垣克 学長：学長の西垣です。本日は天候も恵まれました。皆様方にもご案内を差し上げた通り、岡村昭彦さんの蔵書と関係資料を我々県立大学でお預かりして、そのまま所蔵するような形になっておりました。小幡図書館長や前坂先生、比留間先生たちの努力が実って、やっと二年もかかってというのが正直なところでございますが、広

く一般にご利用していただけるような体制が整いました。今日は理事長も出席していただいて、岡村文庫のオープニング記念ということでお集りいただいた次第です。

御覧いただいたビデオ(NHKで放送された『訪問インタビュー』。「岡村文庫」にて貸出

可：編者注)は、私も以前に見ております。なぜか自分の人生の生き方とも重なりあいがあるんです。私は、ODA絡みで国際保健というようなことをやっておりました。岡村さんが行かれた後に私が何カ所か訪問しています。アフリカのナイジェリアで、ラゴスっていうところ、そこに私も足掛け8年くらい通いまして、その間2回クーデターに遭遇したっていう経験があるんです。ベトナムも、ちょうど岡村さんが有名な本を書かれた頃でしょうか。その後1991年、岡村さんの後を追うかのようにラオスからベトナムの方に参りました。そのときの仕事はエッセンシャルドラッグといって、人間の生きていくための最低必要な薬をどういうふうに提供していくのかというスキル。もうひとつは、今もミャンマーで感染が恐れられているデング熱の対策をどうしたらいいか、サイゴンのパスツール研究所と一緒に仕事をやってきた経験がございまして、私個人としても非常に岡村さんの生き方に共感するところがございます。

お亡くなりになる前はこの静岡の舞阪というところで、ホスピスも含めて今の医療の直面していることに鋭くいろんな批判をされている。もう少しご長命でいただければ、私どもの大学、薬学、看護、栄養、医療関連職種の教育を担っている大学としてはもっといろいろ議論をしたり講義にも来ていただければありがたかったなぁという思いがするわけです。

医学というものを考えますと、岡村さんは単なる狭小を追っかけていくのではなく、人間の生き様とか命の燃え尽き方ということに非常に関心を持たれていた方ではないかなという風に思います。医者とか医療というのを批判的におっしゃることが多いんですけれども、これはやはりいわゆる医学というものの視野の狭さであったり、人々が生きてる目線というのはそんなものではないんだということが最もおっしゃりたかったことではなかろうかと、私なりに解釈するのです。

今、岡村さんが長寿を謳歌されていればその後ベトナムっていうのは目覚ましい発展をしていますので、今のサイゴンを再度訪問されたらどのような感想を述べられるかなという思いが致します。本当に我々人類にとって戦争とは何であるとか平和を維持していくにはどういった努力が必要なのかということが再度問われているというふうに思います。

岡村昭彦の精神、生き方の足跡として残していただいたものを素材にして、我々の光は小さい光かもしれませんが、大学において戦争の悲惨さを少しでも減らしていくためにはどういった活動を我々が続けていかなければいけないのか。我々大学も限りがある中での活動でございしますが、幸いこの岡村文庫が再整備されましたので、広く県民の皆様方に日常的に大学にお立ち寄りいただいて、我々とともにそういうようなことの勉強をし、思索もし、また社会に必要なものがあれば必要な情報発信をしていく。一つの小さい声ではありますが、我々の志、魂の大きい故郷になるような活動をぜひ続けていきたいと思っておりますので、今日限りということではなく、これからも長いお付き合いをいただきたいと思います。

研究ノート・資料

再整備に関してはご家族の皆様方、縁ある方々に大変ご協力をいただきましたし、いろんなご配慮をいただきました。重ねて御礼を申し上げると同時に、岡村昭彦に集う多くの皆様方に今日お集りいただいたということで、県立大学を代表して、心から御礼と喜びを申し上げます。今日限られた時間ではありますけれども、岡村昭彦をただ思い出す、懐かしむという会にするのではなく、ここから我々人類、ないしは人間としての生き方にささやかな灯火が広がっていくような、出発点になるような会にしていいただければ大変ありがたいと思っております。どうぞ本日のこの会が皆様方一人一人にとって、有意義な会になることをお祈り申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。本日はご参集いただきましてありがとうございます。

司会（増田曜子 図書館事務長）：本日は主催者といたしまして、公立大学法人鈴木雅近理事長にもお越しいただきました。よろしくお願い致します。それでは引き続きまして、小幡図書館長より岡村文庫の経緯及び岡村春彦さまのご紹介をさせていただきます。

岡村文庫の経緯など（小幡壮 図書館館長）



小幡壮 図書館長：こんにちは。国際関係学部の小幡です。今日はずいぶん暑い中、足をお運びいただきまして、どうもありがとうございました。少しの時間をいただきまして、岡村昭彦の紹介、それから岡村文庫が県立大学に所蔵されるに至った経緯を簡単に説明したいと思います。

岡村昭彦は1929年、昭和4年の生まれでして、小学校中学校を戦前の教育で受けています。彼が一躍「世界のOKAMURA」というふうにならっていくのは、皆さんご存知のようにベトナム戦争の報道なんですけれども、それがだいたい30歳を過ぎてからです。それ以前は日本の各地でいろいろな取材をしているわけです。その頃にいろいろな社会的な現象であったり、あるいは底辺に生きている人たちの間に入り込んでいって、民衆の立場からいろいろ日本の問題を報道しておりました。

彼の転機は、インドシナ、ベトナムに渡るわけですがけれども、昭和30年代後半といえますと、日本は今中国の状態でもオリンピック一色でして、新聞やジャーナリストがインドシナでどういうことが起きているのか、ベトナムでどういうことが起きているのか、というようなことに、あまり目を向けることが出来なかったわけです。そういった中において、いち早くインドシナ、ラオス、ベトナムに足を運んで、その現状、

どういうことが行われているのか、どういうことが起きているのかということ、つぶさに世界に向けて発信したのが岡村です。当時世界中で読まれていたライフ社の『ライフ』の表紙の中に大スクープの写真が採用され、「世界のOKAMURA」になっていくわけです。その当時、世界を動かしていく何人かの中で重要な人物として彼が挙げられていたんですね。

彼の仕事は、そういうふうには世界のジャーナリズムの目から見ても、あるいは世界の報道に携わる連中の中から見ても、彼の動き、彼が行う報道というものが非常に注目された時代、それが1960年代後半のことでありました。彼はベトナム戦争の報道の経緯でベトナム自体への入国が禁じられるようになってしまいます。そして、彼は自分の活躍の場を今度は世界に求めていくわけですが、アンゴラとかビアフラ、そういったところに行って、アフリカのいろいろなひどい飢餓や内戦状態であるとかつぶさに自分の目で見て、それを世界に向けて報道する。あるいは、現代のアメリカ合衆国の政治を司っている場、エリート層のオリジン、出所であるアイルランドに足を運んで、一体アイルランドというのはどういう歴史を刻んできた土地なのか、そこから合衆国に渡っていった人たちはどういう歴史を歩んできたのかというようなところから、そのアメリカ合衆国の歴史の根源みたいなものを探ろうとしていくわけですね。そういうふうには、世界を股にかけて、報道していきます。そういうようなことを精力的に行っていた人物、それが岡村昭彦であるということです。

岡村文庫、現在うちの図書館に入っております岡村文庫について若干触れなければならないのですが、本日配布しました資料のプロフィールの後ろ側に1975年ぐらいのところに、この年あたりから浜松の舞阪、かつては舞阪町、現在は浜松市に合併されて、浜松市舞阪町になっておりますけれども、この舞阪の家に、いろいろな本あるいは資料を集め始めます。おおよそ1989年にその蔵書類を県立大学では譲り受けるわけですが、最終的には1万6000冊、それからその他の資料を県立大学では1989年の3月、寄贈していただきまして、県立大学の図書館で保管するような形になっておりました。実はそれ以来、本来であれば、岡村文庫というようなスペースを作って、その彼が集めた1万6000冊を一目で見渡せるような場所を確保して、そういったところに彼の蔵書を保管するべきであったのですが、それがなかなかできませんでして、表現はあまり良くないですが、一般の図書の中に紛れ込むような形で配架されておりました。

今から3年くらいになるんですが、学内の先生方から、もう少し岡村文庫、岡村を少し見直すことを始めなければならないのではないかという声があがってきまして、岡村昭彦研究会なるものを立ち上げました。で、その研究会の中でも、やっぱり岡村文庫の蔵書を一カ所に集めて閲覧できないかということをやたらと図書館に対して要望して参りました。それが大学当局、あるいは当局理事の方にいろいろ理解をしていただくようになりまして、今年の3月に、後から皆さんを図書館にご案内致しまして

研究ノート・資料

岡村文庫の文庫室を見ていただきますけれども、そのスペースに全て1万6000冊の蔵書を集めて配架して利用できるように致しました。これから学生はもとより、教職員、そして一般の方々にも、積極的に岡村文庫を利用していただいて、さらに活用していただいて、岡村研究のみならず、それを出発点にしていろいろな興味範囲のところを発展させて、勉強や研究に役立てていただきたいなというふうに思います。今日は岡村文庫オープニング記念式典に参加いただきましてどうもありがとうございました。

司会：ありがとうございました。それでは、本日来賓としてお越しいただきました岡村春彦さまからご挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願い致します。

岡村春彦氏のご挨拶



岡村春彦氏：相当ことばが駄目なのであまりできないのですが。僕はこういう体になる前に、兄貴の書いたものがここにあって、それをここへ集めたのが僕なんです。そのときにはまだできないからばらばらにいろいろなところにおくけど、こういうように作るようには出来ないって言われて、僕はそれでも兄貴の名前を本に書いたりしたんですね。それが今度そうではなくて、もういっぺん作り直そうって、こういうものへ換えてくださったっていうのは本当に嬉しいと思います。ありがとうございます。まだ僕のところにも少し兄貴の書いたものなんかが残っていると思いますが、たくさんあるんです。



見てみればわかりますけど、いろんなことを、本がものすごくたくさんあって、その中に名前が書いてあります。全部書いてあるんです。兄が全部触っているんです。僕なんか勉強しようと思っても面倒くさいからやめようってなって、本だけ借りてもらったりして知らん顔して、僕はそっちの方なんですけど、

兄貴なんかはもう本当に全部の本をきれいに残して書いてあるんです。そこだけ見てくだけでも嬉しいと思います。それから、僕と兄貴は歳が違うんですよ。兄貴の方がずっと上で、歳が離れてるんです。子どもの頃に兄貴は僕も連れてきてくれて、うちがガ



タガタでぶっ壊れてしまったんで、行くところがなくて、兄貴と二人で東京の北の方へ突然山の奥へ隠れていたりしたことがあるんですね。兄がお金を集めて集めて本をあれだけ集めてものです。素晴らしいものです。ぜひお願いします。

司会：貴重なお話をありがとうございました。岡村さまにはこのあと鼎談がありますので、今のようなお話も含めてじっくり、岡村さまでなければ語れないこと、身内の方でないといけない貴重なお話をしていただけるということで、とても楽しみにしています。本当にありがとうございました。そして、本日私たちはもうお一方、この会場にぜひお呼びしたかった方がいます。それは会場の正面にお花をいただきましたけれども、函館にお住まいの、長女の佐藤純子さまです。佐藤さまには、今日のオープニングの記念にお花をいただきました。本当にありがとうございました。佐藤さまにもぜひ今日来て頂きたかったのですけれども、いろいろなご事情がございまして、来ることが出来ませんでした。それで、本オープニングにあたりまして、メッセージをいただきましたので、ここで私の方で読ませていただきます。

佐藤純子氏のメッセージ

静岡県立大学附属図書館 増田様、皆様様

岡村文庫講演会 パンフレット他ありがとうございました。今回は都合がつかず、本当に残念です。1985年、父昭彦が逝って、主がいなくなった舞阪の家、残された本、資料を前にして、私は途方に暮れました。こんなのはもうゴミだ、廃棄処分という声もありました。そんな中、どうにか、この蔵書を資料として残したい、目録を、という思いが広がり、コピー機を運び入れ、日々本のコピーをとる作業を続けました。春彦さん、雅子さん、加清夫妻をはじめ、母親の会の皆さん、各ゼミの方々、有志の人々、延べ何百人が参加し、時間をさいて下さいました。今の、多くの昭彦の会の皆さんです。写真集出版時にも、膨大な未整理のネガと向き合ってくださいました。父が世界、そして日本のあちこちでこれらの本と出会ったように、今新たに岡村文庫が出会いのきっかけを作る場所となると良いですね。皆さんに感謝です。ありがとうございます。

2008年5月23日 函館 佐藤純子

いつかまた佐藤さまに来ていただいて、ご講演などをいただけたら図書館としても本当にありがたいと思っております。それでは、引き続きまして、「あのころのこと」と題しまして、暮尾淳さまから講演をいただきます。小幡図書館長から暮尾さまのご紹介をさせていただきます。

小幡：このあと講演として暮尾淳さんに「あのころのこと」というタイトルで講演していただくことになっております。暮尾さんは、昭彦に関する本としましては、『カ

研究ノート・資料

メラは私の武器だった』という本と、それから『岡村昭彦集』全六巻の監修をなさった方です。もちろん岡村に関するお仕事以外に詩人として、あるいは評論家として、いろいろな書物、業績のある方ですが、今日は岡村に関してのみ紹介させていただきました。それでは暮尾淳さん、「あのころのこと」と題しまして、講演をいただきたいと思います。よろしくお願い致します。

暮尾淳氏のご講演



暮尾淳氏：暮尾淳です。ただ今は岡村昭彦のことに関してご紹介を受けました。私は暮尾淳という名前で長いこと詩というものを書いていまして、詩を書く人たちの間での私の呼び名は「ヨレヨレボロボロ詩人」です。ですから、あんまりこの素晴らしい岡村さんとはそぐわないのですけれども、そぐわないわけなども今日しゃべらせてい

いただきたいと思います。

なんといってもこの文庫が出来たようになったのは、1988年、『岡村昭彦蔵書目録』、アイルランドの緑の、濃いグリーンを表紙でできたもの、それがきっかけです。ですから、そのために3年間にわたり奥付や目次のコピーをとったり、そういう仕事をなさった岡村昭彦のグループ、特に女性の人たち、その力がとても大きいので、本当はここで話するのはその人たちだと思うのですけれども、その人たちの一人があとで講演に出てくださるので、それならば本来ならしゃべる第一番は娘の佐藤純子さん。その次は、弟の岡村春彦さん。私は三番手です。

岡村さんが亡くなったのは1985年3月24日。56歳。ちょうど僕の10歳上。その時はやはり人間は死ぬんだあって当たり前のことを思ったりしたものです。私は現在69歳になりました。そうして、私のこの13年を振り返ってみても、昭彦さんはなんて若かったのだろうと、それを今日も痛感します。何回も岡村さんが日本で住んでいた舞阪と東京を私も往復しましたが、今日も新幹線に乗ってしみじみとそう思い知ったことです。1985年の岡村さんの死のことになるわけですが、その二週間くらい前にアイルランドから帰ってきて、あとでわかったんですけど、敗血症、緑膿菌という菌が体の中を回っていたんです。しかし最初の頃はそれがよくわからなかった。僕は、入院して二日目か三日目のときに彼に会いにいったんです。西新宿にある病院で、ベッドに彼は寝ていたんですけど、私がそのときネクタイをしていたわけです。それは手編みの黒のネクタイでした。そうしたら、ベッドから手を伸ばして、「誰かの葬式から帰ってきたのかい。」と。普段だって僕は黒のネクタイが好きですからし

ていたんですけど、なんでこんなこと言うのかなと思って。おやそうか、自分の命が危ないと思っているのかなって思ったりしました。彼は手先なんか非常に細いんですね。足首に流れる線も実に細い。

全体はたくましいんですけど、そういう収まっていくところに何か気高い感じがありました。その時はもう知っていましたが、さすがに日本の上流階級というような気がしました。さすがに、は余計だったかもしれません。その病室からの去り際でした。目白のお母さん、職業軍人だったお父さんの二番目の奥さんで後妻さん、とてもいい人でした。その人が昭彦さんの手をさすったり足をさすったりしていました。すると突然僕の方を見て、「フォーションのパンを食べたいなあ」と言うんです。フォーションのパンってクロワッサンみたいなものだったと思い出すのですが、彼は非常にそれが好きだった。珍しいことにそんなこと言うんですよね。それで、僕が「昭彦、でもやっぱり病院では食べてはいけないって言うんだらう」と言うと、そしたら彼が突然ベッドの中で彼独特の自分に言い聞かせるときのやり方で、悍馬がいなかったときのような首の振り方をして、「それはそうさ」と言ったんですよね。それは自分は食べたいが、いやその欲望に走っちゃだめだといって自分を命の側に引き戻そうとしたような、そんな動作と言葉でした。「それはそうさ」、そういう一言でした。それが、彼が56歳、私が46歳のときでした。それから23年が経ちました。彼はもうこの世にいません。時々私は思うんです。なんていう、俺って言うのは未熟な人間だったろう、と。46歳っていったら、子供二人いましたし、一人前のはずですが、まだ半人前だったんだなと思います。なんで、たった一言言ってやれなかったらう。「今度医者がいなくて夜こっそり持って行くよ」と。なんでそんなことが言ってあげられなかったのだから。そう言ったら、今度昭彦の方も「それはそうさ」なんて言わないで、「いやあ、そんなことまでしなくてもいいよ」と言ったかもしれない。そんなふうに昭彦に悪かったなあと思うと同時に、やっぱりそれを思うと時々胸が痛みます。私の勉学が病んだ体ということについて遠く及んでいなかったんです。

これは岡村昭彦集の第五巻です。これは一巻から六巻まで筑摩書房で私と岡村春彦さんが編集して出しました。岡村さんが死んだあと、いろいろ整理されてると言われていたのですが、実際は仕事場はもうめっちゃめっちゃでした。ネガもどこにあるのかわからない、書き直したという原稿もどこにあるのかわからない、載った雑誌もどこにあるのかわからない、それを二人で懸命に整えました。なぜ二人なのかというと、国際報道のソースとして秘密のものが出ないともわからなかったからです。それで二人切りで編集したのです。その二巻の月報に岡村純子さん、娘さんがこういうことを書いていました。岡村昭彦さんに娘が生まれたとき、つまり純子さんが生まれたときのことです。

研究ノート・資料

私に、「昆布」と、名付けようとして、母に反対され、父の最初の恋人の名、純子と名付けた。妹には、彼女の弟の名、聡。



実は私は、この純子と聡の間にいる人間です。岡村さんとの間に法的関係はありません。岡村さんは釧路で医師法違反と当時の思想関係で留置所に入っていました。それが釈放になって出てきたんですけど、釈放されると住所が必要になるんですね。その現住所が、何と札幌の私の家だったんです。なんでそんなことになるのかって

うと、私の先ほどの姉の純子が、十八歳で自殺してしまったからです。そのことに岡村さんも絡んでいて、自殺の原因そのものじゃないけれど恋人としての立場があったわけですね。そのへんのことを話すともう何時間もかかるのではしよります。それが私と岡村さんとの関係です。私がちょうど十二歳、小学校六年生から中学校一年生にあがったときから、半年間22歳の青年岡村昭彦さんと一緒に暮らしました。昭和27年のことです。もちろん私から見たら、全く素敵な兄貴分が来たなという感じでした。どこに行くときでも後ろについて歩いて、野球も教えてもらったし、釣りもしたし、古本屋にも行ったし、コーヒーもこっそり飲ませてもらったりした。大変ありがたい兄貴でした。それで私と岡村昭彦は知り合ったわけです。それから十年くらい途切れるんですが、『南ヴェトナム戦争従軍記』の頃から、またずっと彼が死ぬまで永遠の付き合いでした。そのころについては面白い話がいっぱいあるんですが、それはまたのときに致します。ヨレヨレボロボロの詩人と言われる私が、ここで岡村昭彦さんのことを語る理由を皆様になんか納得していただけたかと思えます。そんなふうに私と岡村昭彦の関係はあったわけです。

岡村さんを一躍有名にしたのは誰もがご存知のように『南ヴェトナム戦争従軍記』(昭40)でした。その続篇に記されているのですが、解放戦線の捕虜収容所にスパイじゃないかと疑われて捕まってしまう。彼は写真を撮ることが出来ないわけです。写真は最後に許されて撮った一枚だけでした。これが当時の解放戦線の写真でした。これは記憶しておいていいように思うのですが、このことを写真雑誌『LIFE』が特集したわけです。それは岡村さんの文章とイラストによるものでした。あれはとても貴重なものです。写真雑誌、当時世界中で六百万部と言われていた雑誌が、写真を持ってこなかったカメラマン、フォトグラファーのルポルタージュをイラスト付きで載せたんですね。たった一枚、写真があるだけなんです。これはいかに岡村昭彦が信頼されていたか、証言に嘘がなかったか、またいかに証言が貴重なものだったかということの証拠だと思います。それはとても貴重なものですからたぶんこの文庫の

『LIFE』に入っていると思います。ぜひ見ておくと良いと思います。その後ライフでそんなことしたことはほとんどないでしょう。写真を撮れなかった男というのはフォトジャーナリストとしては失格ですからね。その人の体験記に基づいてイラストで特集を組むなんて、正直言って写真雑誌としては自殺行為ですよ。

後に自分でフォトジャーナリストと言っていましたけど、これは写真家すなわちフォトグラファー・アンド・ジャーナリスト、それを縮めてフォトジャーナリスト。そんな意味で、インターナショナルなフォトジャーナリストというような言葉、概念を確立したのは岡村さんが日本で最初であったろうと思います。ジャーナリストという言葉の語源は、日記ですね。商家の人たちがお金の出し入れをする記録から、ジャーナリズムという言葉が出てきたんです。ですから、今新聞とかテレビとかでいうジャーナリストというのは違うみたいです。

岡村さんがいかに真剣に本を探していたか、あるいは、岡村さんがどんなに古本屋を愛していたかということは、先ほど言った『南ヴェトナム戦争従軍記』のころからでした。彼がその原稿を清書したのは筑豊文庫、福岡の上野英信さんのところでした。上野英信さんの三疊長屋ですね、そこを筑豊文庫と称して、岡村さんも本を集めたりしました。その上野英信さんのところで、彼は岩波新書『南ヴェトナム戦争従軍記』(正・続)を書いたわけです。岡村さんの指南役だった上野英信さんが『岡村昭彦集』の第1巻の解説にこんなことを書いていますので、読みたいと思います。

岡村昭彦についてのぼくのイメージは、ふしぎなことに、どうしても戦争とは結びつかない。いつもきまって古本屋と結びついてしまう。古本屋をあさり歩くときの嬉々とした表情や、かろやかな足音ばかりが、あざやかに思いだされる。まったく彼ほど古本屋のすきな男もめずらしい。南ヴェトナムの戦場に身を投じてからも、やはりその習癖は変わらなかった。ときたま休暇をとって日本に帰ってくるたびに、彼はあわただしい日程を盗んではぼくをおとすれ、古本屋まわりに連行するのがつねであった。時間がなくなると、タクシーをとばしてでも、古本屋をまわる。そして出発時刻ぎりぎりにほこりまみれの古本をかかえて、かろうじて汽車や飛行機にとびこむ。そんな男であるだけに、本の値段も詳しければ、値切るのも天才的にうまい。

というふうに書いてあります。つまり岡村さんは本集め、資料収集を熱心に行ない、証拠としていろいろなものを読み込んでいたんですね。さきほどの、純子さんのお話に戻りますと、岡村昭彦さんがアイルランドにも住んでいたことは皆さんもうご存知だと思えるんですけども、そのアイルランドでのことを純子さんが『岡村昭彦集』第2巻の月報にこうも書いています。

私は、父には古本屋が似合うと、思っていました。

研究ノート・資料

「そんな本、下らないね、貴方には、その本売りたいくないね」なんて、好き勝手の言い放題。

そういうふうに父親をイメージするんですね。そして時々こうも言ったそうです。

「俺、墮落けてたなあ。駅のベンチにでも寝て、あの本買っとけば良かったなあ。もう無いだろうなあ。本とだって、出会いだもんなあ。もう巡り会えないかなあ。駄目だな」と、後悔する父。

こんなメソメソしたことを昭彦が言ったとは思えないんですけど、娘の前ではそうだったのかもしれないですね。そしてこれは、アイルランド南部の、コークという町でのこと。

父はいつもの様に、「ちょっと、行って来る」と、古本屋へ。戻るなり、「さっき、要らないって言った金、貸してくれ」それを持って、またどこかへ。戻って来る時の嬉しそうな顔。宝物でも見つけたみたい。手には何冊かの古本。あの古本の臭いが舞阪の家に集まってしまいました。本の重さで、家の床が抜けてしまったそうです。いつからかあの家は、本に占領されてしまっています。



いかに岡村さんが本というものを大事にしていたかということの身内からの愛情のこもった証言だと思います。1975年、ヴェトナム戦争が一応の終わりを見せました。その頃から岡村さんは、舞阪に意欲的に資料を集めるようになりました。「母親のための資本主義講座」、「新聞の片隅から」など、これはみんな岡村昭彦集にも載っていますけれども、そんな仕事をしていました。「ホスピスへの遠い道」、これが最後の仕事となるわけですが、これはそういう資料、世界中の本がなければとてもできなかった仕事でした。そのために彼は世界中取材して歩いて、資料として本を買っていました。岡村さんが未来の生命のために、我々はどんな時代に生きているか、そういうテーマを巡って世界中巡り歩いて本を集め歩いて仕事をしたのです。そしてアメリカやイギリスの図書館が日本とどのように違ったかというようなことも書いています。以下は『ホスピスへの遠い道』（『岡村昭彦集』第6巻）からの拾い読みです。

(第6巻 p.28) 私はアメリカの図書館で身分や国籍を問われたことがない。司書が

真剣に私に尋ねるのは、私がいったいどんな資料を探し求めているか、ということだけである。そのような人間の求めに応じることができるように、レファレンスのカウンターに彼女や彼は座っているのだ。だから資料を提供する側のほうが、資料を探しに来た人間に「サンキュー！」と言うのだ。

こういうふうに書いてあります。「しかし、日本ではこれが逆だ。」ここ（静岡県立大学附属図書館のこと：編者注）では逆ではないだろうと思えますけれども、そんなことを彼は思ったんですね。それで、どんなことを彼がさらに述べていたかと言いますと、

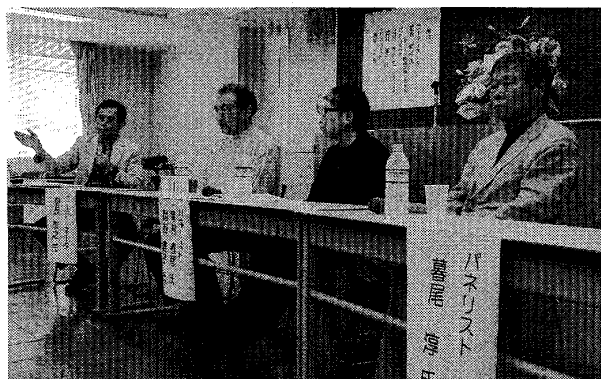
(第6巻 p.129) 本を買うことは、人間の出会いと同じである。だから私は、本を買った日の夜に必ず赤いボールペンを右手に、ページをめくり新鮮な印象を書き込むことにしている。どんな本でも買う以上は、そのときその本を家族の一員にするだけの理由があるからだ。私は近代ホスピスがマザー・エイケンヘッドの手で、イギリスの植民地であるアイルランドに生まれようとしたときに、イギリスの労働者階級と共に看護がどのように育っていたかを、正確に知りたかったために、この本を選んだ。

これは看護史の本ですね。彼は非常に本というものを自分の命のように大切に仕事をしたのです。いかに資料というものが自分の知らない世界史の現場を見せてくれるか。あるとき、彼から電話がかかって来たんです。飛行場のカウンターが彼の荷物が三キロだか四キロオーバーしていて超過料金を支払わないと通さないことに対して、烈火の如く怒って電話をかけて来て、私はびっくりしたことがありました。その位の超過をとがめるなんて、日本以外で経験したことがないと言うのです。とにかく彼はいつも超荷重量で飛行機に乗る男でした。それはなぜか。人間と同じように出会った本がいっぱいだったからです。そういうヒューマンな、知的探究心に富んだ素敵な男であったと思います。

司会：貴重なお話をどうもありがとうございました。身近にいて温かい目でなおかつ客観的な視点で岡村さんを語っていただいて、参加者の皆様の中にもいろいろな岡村像が見えてきたのではないのでしょうか。それでは、引き続きまして、岡村春彦さま・雅子さま、暮尾淳さま、そして本学国際関係学部の前坂教授との鼎談をさせていただきます。鼎談に先立ちまして、小幡図書館長より趣旨とパネラーの紹介をさせていただきます。

鼎 談

小幡：ではご紹介いたします。岡村昭彦氏の弟さんである岡村春彦さんです。パネラーということになっていますが、パネルディスカッションという形で雅子さんにも入っていただきまして、要所で話していただきます。それから今講演していただきました、暮尾淳さん。それから司会役を兼ねてコーディネーターということで、本学国際関係学部教授の前坂先生に司会役をお願いすることにしたいと思います。前坂先生は我々が今から2年前、3年前ですか、岡村文書研究会を立ち上げたときからのメンバーでして、世話役と言いましょか、会長役をやっていただいているかたです。それでは、よろしく願いいたします。

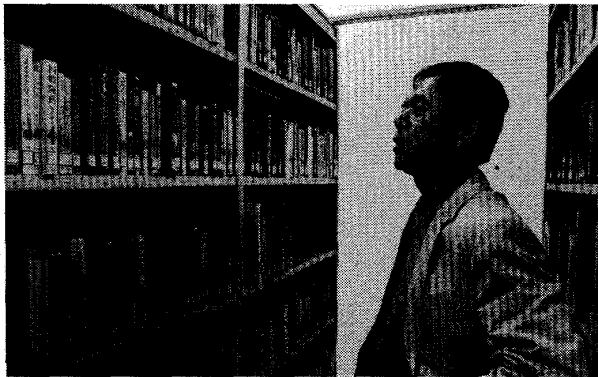


前坂：みなさんこんにちは。舞阪ではなく、前坂と申します（笑）一字違いなんです。前坂と申しまして、本大学に来る前は毎日新聞社に在籍していました。毎日新聞社に入ったのは、学生時代に大森実先生の話が大変心に残りまして。また、岡村さんの写真も毎日新聞でどんどん掲載したりということをしておりました。50歳で轉身しまし

て、その時に本大学に在籍しておりました鈴木静夫といいます、これまた毎日新聞の外事新聞でベトナム戦争の報道をやっていた先生がおりました。その先生が今回のこの岡村文庫をこちらで受け取りたいといった、いきさつがありました。そういった点で岡村さんは、非常に強く胸を打つような感じだったんです。

今はベトナム戦争そのもの、それから岡村さんの名前も学生はよく知っておりません。それでこちらは、学生に岡村さんの存在を説明するときに、こういった説明をしております。太平洋戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、イラク戦争、そういう戦争報道は、各国のジャーナリズムが、戦場に入っていくんですね。そうして競争をやるわけですよ。そういう中で岡村さんは単身で、フリーでもってベトナムに入っていくって、第二のロバート・キャパといった世界的評価を果たしていくわけです。そういう点においてはジャーナリズムという、オリンピックの金メダルを獲得したのが岡村さんであるという風に私は考えております。岡村さんはこの50年の範囲で見ましても、日本のジャーナリスト、それから組織内ジャーナリストの中でも際立って国際的な活躍をしたように思いますし、岡村さんのそのものの存在が非常に強いわけですね。その後ベトナム戦争のあとアフリカに取材に行き、公害問題、環境破壊の問題をやりますし、1970年頃の看護の問題、老人問題にも関心を持って、最終的にはホスピスの問題であれ目をつけて、国際的に先見性をもったジャーナリストだったと思います。

今回は、この大学で岡村文庫の全体的な資料を、これまでは各棚の本のあいだに入っていたんですが、それを独立した部屋で個人文庫として並べました。岡村さんの問題意識といいますか、1万6千冊の1点1点が、すごい選択なんですよね。そういった点でびっくりしまして、これはどうしても前置きといたしまして、蔵書の収集に関してちょっと触れてみたいんです。たとえば彼は産業とか農業それから製造業の関係も、まんべんなくぜんぶ収集しています。鉄鋼、電気、電蓄などそういうあらゆる産業ジャーナルの基本的文献、それから業界誌。全部集めるとどういうわけか、こういう本まで持っているんですね。

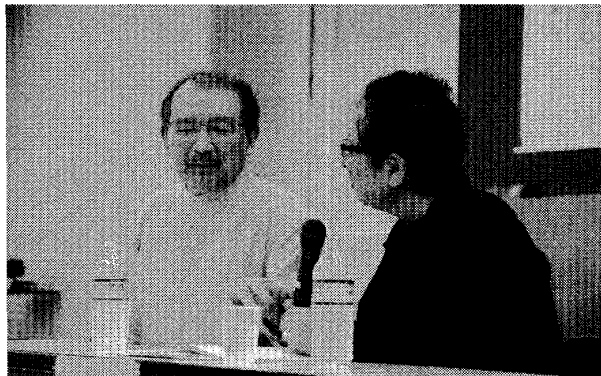


僕なんか驚きましたよ。たとえば建築材料の歴史、コンクリートの建築施設、建築士試験積算法、つい最近姉齒の建築法偽造問題がありました。それからネジフィンガー、金属便覧ですね。こういう非常に得意な分野を主に読んでいって自動車関係、道路関係もありますね。その中で、昭和9年の蓄電池車。いま問題になっている電気

車ですね。これも先駆的な本だと思うんですよ。こういう本も持っておりますし、あらゆるジャンルを幅広く徹底して集めています。たとえば化粧品、石鹼、ゴム、プラスチック、ミシン、パルプ、ダンボール。こういう専門職全部なんですね。また食品関係では食品産業の本もちろんありますし、農業、砂糖辞典、チューインガム工業、ビスケット工業史、こういうものも読んでますし、もっとアットランダムに言いますと、日本冷凍史、缶詰、東京ワイシャツ史、ネクタイ史、靴下史。こんな森羅万象に集め、全部線を引いていたというの驚きですね。なおかつ国内だけでなく、彼の1万6千冊のうち4千冊は海外のもので、英米の文献が中心ですが、ベトナム語、それから中国語、そのような文献がたくさんあります。海外の文献ではたとえば、最近問題になっているチベットに関しましても、専門書が10冊ばかりありますし、インド。最近のブリックスの関係でインドが非常に注目されていますが、インドに関しましてもなんと200冊ぐらい専門書があるんですね。アメリカの英語の文献が110冊。それ以外に外国の文献が10冊。とんでもない、世界的な収集があるんですね。100年、500年単位で物を見る、ということを彼は言っていたそうなんです。海外のこれまで植民地にされていた国々への目配りもやっています、アフリカ関係も350冊ぐらい、海外文献が中心ですが、収集されています。彼は世界的に活躍したジャーナリストであるというのはもちろん知っていたんですが、こんなに読書家であってなおかつ森羅万象、ミクロに専門的な分野まで目配りしていたというのは今回蔵書の分析をして初めてわかりました。これから皆さんをご案内して見ていくわけですが、1冊1冊のタイトルをご覧ください。本当に驚きます。前置きが少し長くなったんですが、膨大な

研究ノート・資料

本を集めていくにも、なかなか定期的な収入もないでしょうし、20歳代の岡村さんがどうであったか、その辺りをお話していただきたいんですが。33歳でベトナムの方に取材に行きますよね。東京医専を中退された20歳から、東京で闇市その他あってそれから春彦さんを引き取ったというふうに書かれています、その辺り20代ではどういう風な生活をされていて、その中で問題意識を持っていったのか、というのをお話していただきたいです。



雅子氏：岡村春彦に代わって、さっき図書館を見ながら話していたことを伝えます。岡村さんの家というのは結構裕福な家庭だったみたいで、原宿にお家があって、そのお家の庭ですね、洋館だったみたいなんですが、図書室があって、それでそのさっきの書架を見て岡村春彦が言っていたんですが、梯子がついているような図書室があって、

いつもお兄さんが、お兄さんは春彦よりちょっと年が上だったんですけど、その書架を利用していらしたみたいです。春彦が小さかったので、利用しないうちに焼けてしまったんですね。そういう家庭環境だったということと、引っ越ししなければいけなかったという家庭の事情もあったみたいで。春彦を途中で引き取ったりするんですけども。

春彦氏：もうその頃から本をいっぱい持ってて、いったん家で買ったものなんかもちょっと残してあって、そういう物は絶対持ってっちゃいかん！と僕なんかは兄貴に怒られて、お金がないからってこれを持ってっちゃいかんと、これが1番大変なことだから、と鎮められて。俺たちは食うものないときでもそれだけ持ってたりとか、そんなことはあったね。ただ、そういうとなんだか偉そうだけど、僕のおふくろのほうは別のところの偉い人でした。子どもの頃から兄貴と姉も麻雀が得意でしたね。それで何かっていうとお金を賭けて、嬉しそうにやって、そうするともう負けちゃうからお金が無くなっちゃって、ぼくらは食べられなかったよ（笑）。

雅子氏：本の話に戻りますけど、この年表によると1954年に函館市の小売書店で働き、というふうにあります、その時に栄文堂っていう本屋さんの本のディスプレイにこだわったっていうのを聞いたことがありますけど。

暮尾氏：そうですね、私も昭和14年生まれですから、その時はまだ函館は遠い札幌の中学生か高校生だったんで知りませんが、要するに知的好奇心を、それもいい加減じゃないやつね。まっとうな好奇心をそそる、ということじゃないかな。そんなような感じに新刊なんかも並べた、という風に聞いています。つまり俗でなくて、あんまり高尚でもなくて、ちょうど中間ぐらいで、とても人の好奇心を呼び起こすような本

の並べ方、ディスプレイをしたんだと、彼自身の口から聞いたことがあります。しかし僕は実際を見たことはありません。

前坂氏：岡村さんの方法論としまして、まず第一は世界の視点から日本をとらえて、グローバルな視点が第一になります。それから日本の問題の前に、中央じゃなくて、ローカルから、地方からとらえるという、そういう視点と同時に、絶えず弱い者が公害・環境問題その他に傷つき、差別され、戦場で殺されて、そういう弱者の視点で報道をやっていますよね。こういう方法論の問題と同時に、彼のヒューマンイズムといえますか、そういう精神部分が出来上がったのはやっぱり20代の経験だろうと思うんですが、その辺りの彼の精神形成の中で最も大きかったというのはどういう点なのでしょう。トラピスト教会に入っていますし。

雅子氏：お母さんがクリスチャンだったんですよね。トラピスト修道院の客室係として入った時にも、その時期にも或ることがあったと思うんですが。それをお母さんがこういうところに行って精神修行をなささいと言って、たぶん紹介されて行ったんですよね。

暮尾氏：岡村さんはお母さんを尊敬していました。母親としてトラピストの関係者に一生懸命話をしてくれたために、修道院に行けたんですね。

春彦氏：兄貴は戦争に行く前、有名になる前にはいろんな事にぶつかってしまって、戦後の日本になって日本じゃないところに行ったり、あとはさっき話したように東京で兄のところに行ってそこに隠れていたり、本当にあちこち行っていました。

雅子氏：ここでちょっと助っ人を呼びたいと思います。この年表にもありますが、1974年ころから「岡村さんと母親たちの会」というのがあって、そこで大住さんという方が今日来てまして、その蔵書目録のことも彼女の力無しにはできなかったんです。昭彦さんは、いろんな各港町じゃないですけど、いろんなところに素晴らしい才能をもった、主に女性ですけど、サポーターが何人もいて、実は昭彦さんが亡くなる前というのは昭彦さんを中心にその女性たちは点でつながっていたんですね。亡くなった直後にその点々としていたものが線につながってですね、私たち家族もその方たちと一緒に蔵書なども片付けてきたんです。その一番歴史が長い人といえますか、尊重して色々なことをやっていただいたのが大住さんです。大住さんに多分いろんなことを話していたんじゃないかと思って、春彦が喋れないことを代わりに喋っていただくと思って。20代の精神の形成について、ズラズラとたくさん喋ればたぶん皆さんに話を通じると思うんですが、短い言葉ではとても伝えられることではないので、もし大住さんがご存知でしたら皆さんに昭彦さんの20歳代、精神形成について話していただきたいと思います。

大住氏：そう言われましたけれど、岡村さんって自分のことはほとんど何も話さなかったんですね。私たちは「岡村さんと母親たちの会」というのを武蔵野市で、メンバー15人ぐらいでやっていたんです。彼はだいたい世界を飛び回っていたので、日本に帰っ

研究ノート・資料



てきたときに2日とか3日とか続けて勉強会をしてもらいました。彼は「母親が変わらなければ日本は変わらない」ということで、母親が変わるといのは子供を変えるということなんですが、そういうスパンとしては長い勉強会を15年やりました。勉強会の中で自分のことはほとんど喋らなかったんですが、精神形成のことでいえば、い

ま春彦さんが言っていたのは終戦後の引き上げ船のことだと思います。そういうところで何を見たか。それから、今年「AKIHIKOの会」で玉木さんというジャーナリストの方が話されたんですけれども、とにかく岡村家っていうのはお祖父さんが中央大学の学長をなさっていたようなお家柄で、図書が天井まである図書室を持っていた、というようなお家なので生活をする心配がなかった。そこら辺が私たち庶民とは違うんじゃないかという話でした。そういうところがそもそもの原点にあるんじゃないでしょうか。

春彦氏：その通りなんだけど、戦争で焼けて何もなくなっちゃったから、また変わったんだよね。

大住氏：その図書が焼けたときには火を消そうとして狂ったように走り回っていたというお話を、春彦さんがなさっています。それから引き上げ船に乗ったり、今年の年表にもありますけど闇屋をやったりとか、荒川や千葉の被差別部落に入ったりとか、いろんな経験をなさっているんで、そこら辺が彼の精神を作っていくもともになったと思います。敗戦後はとにかく多くのご家族が鎌倉の別荘に集まってきて、その人たちを全部面倒見なければいけないので、海藻を拾ってそこからヨードを作ると、そんなことまでなされたということも聞いております。とにかくいろんなことをして、自分のことよりも弱い人というか、そういうところに目が向いていった、ということがあるんじゃないかなと思います。

前坂氏：それから、バイリンガルのことですが、17歳で教会に行かれて、その中で英語力は鍛えられたんですか。

暮尾氏：闇市の中で（笑）

春彦氏：そうそう、闇市の中でね。

前坂氏：交渉の中においてですか。

春彦氏：だからあれは少しは役に立ったね。英語面はやってたんだよ。先生なんかは日本の戦争の前はアメリカ軍とかそういう人たちと。

雅子氏：（昭彦氏、春彦氏の）お父様が海軍の方だったんで。で、お父様が役職をリタイアなさった後も、英会話の、まあそのときはまだラジオ番組ですけど、それをずっと毎朝聞いてるって話をしてましたね。家庭環境として英語が小さいときから、

入ってたと言うことはあるんじゃないでしょうかね。

春彦氏：僕は全然ないけどね（笑）

雅子氏：時々春彦さんはひがまれるんですけど（笑）。昭彦さんの上に1人お姉さまがいらして、お兄様と上の2人はお守りさんがついて育てられたような環境で育てられたようですよ。

前坂氏：看護の問題から、最終的にはホスピスの問題までいきますが、そのあたりは何か、きっかけといいますか、何かあるんでしょうか。

大住氏：ひとつはベトナムで戦場を見てきたということがありますよね。あとは、ベトナムで木村利人さんとコンタクトをとって、一緒に勉強したりしていました。今でも、木村さんとはつながっています。木村さんは専門が法律、人権法で、木村さん自身がベトナムで暮らしていて、農薬とか、枯葉剤とか、汚染の問題からバイオエシックスの方に入って行って、それで一緒に歩いていった岡村さんも行き付く先が、やっぱりバイオエシックスになったんだと思います。

前坂氏：それから舞阪の1万6千冊の人民文庫ですか。人民文庫として市民に開放したいというふうなことでたくさん本を集められたと書かれています。この膨大な本の中から、さらに将来的なテーマとして何か考えられたんでしょうか。

大住氏：写真をとる人にいつも言っていたのは、『シャッター以前』ということで、それで岡村さんも資料を集めたんですけど、だからそういう写真家には資料館として提供するつもりはあったようですが、人民文庫というのは私ども聞いたことがありません。

ただ私たちの勉強会で最初に言われたことは、お母さんたちに、毎月お給料の中から、その時はまだお給料は、私の連れあいだって10万はもらってなかったと思いますけど（笑）、そんなところで、「お母さんたち、まず5千円、図書費として取りなさい。それで本を買いなさい」ということで、最初にそう話されたときは私たちも「えー」って思ったんですけどね。それともうひとつは、勉強会でも資料を、自分で買えなければみんなでお金を出しあって資料を買いました。私たちの勉強会は15年ぐらいうったんですが、そこで持ってる本が岡村さんの蔵書とダブっているものも含めて約2千冊になりました。岡村さんのところから欠けてしまった本は岡村さんの本がここに入ったときに、私たちのほうから抜いて入っています。あとまた残った本も、もう私たちが老い先短くなったので（笑）、どうしようかということで、またこちらで引き取っていただきました（現在、比留間研究室で保管中：編者注）。あと勉強会では社史とか伝記とかを多く買いました。そういう本を買って集めたのは私たち自身のためだけでなく、「そういうものがある」、子供たちに「こういうものがあるんだ」と見せるためでもありました。本1冊でも、社史とか伝記とかってこんな厚いですよね。でも読むところは最初の何ページかかもしれない。それでも買いなさいということでした。勉強会自体話ともあちこちで、そういうやり方でした。

研究ノート・資料

前坂氏：岡村蔵書が入るまでの経過につきまして、ここで、当時浜松にいらっしゃった朝日新聞の駄場さんがいらっしゃるんで、ちょっとそのあたりをですね、経過を話していただけますか。



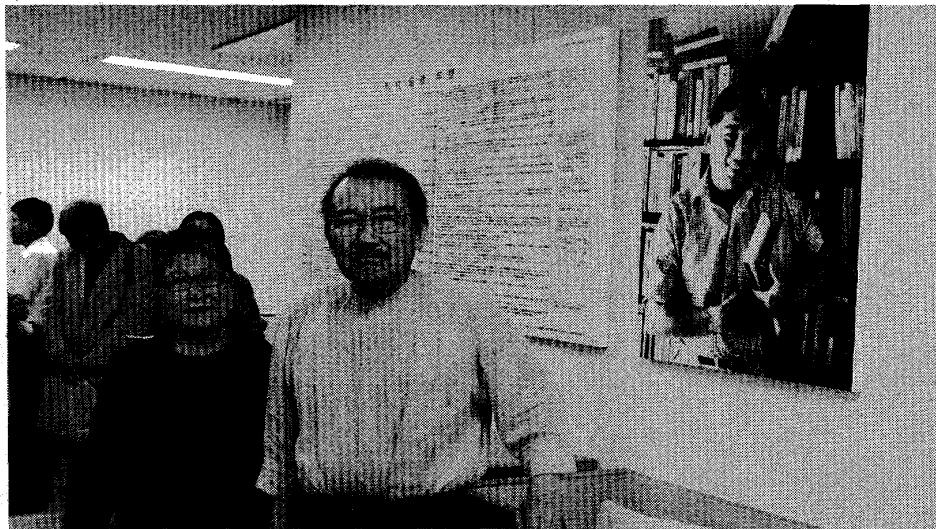
駄場氏：突然ご指名いただきまして。1988年当時朝日の浜松支局におりました、駄場と申します。私は高校、大学ぐらいで写真をひとつ趣味としてやっております、報道写真が好きでしたから、岡村昭彦さんといえますとやはり、日本のロバート・キャパということでひとつ、アイドル的存在だったわけで。NHKの先ほども流れていた番組

でやはり非常に強烈な印象を受けました。その3年後に、朝日の浜松支局に赴任したわけです。NHKの番組で舞阪の家のシーンを流した回があって。せっかく浜松に来たんだから、なんとかあの舞阪の家の記事を書けないもんかな、というふうに思っていたんですが、何ととっても、事件廻りにしても当時は非常に殺人事件も多い時期だったので、なかなかそういう機会がなかったものの、88年9月ですか。9月11日の朝日の東京本社夕刊、それに舞阪のかなり危ない、崩れかかっているような家に、非常に蔵書があるというのを記事にしました。この初代の国際関係学部長だった高橋徹教授が東京大学文学部の教授であった時代、私とその最後の高橋ゼミ生だったという関係もございました。最初はそれを私が書いた記事というのを知らないで読みになって、すぐに鈴木静夫先生に、最初は当時建設中だった横浜市立中央図書館か、あるいはすでにあった浜松市立図書館どちらかを、受け入れ先の候補として、考えてらしたそうなんです。高橋学部長が鈴木教授になんとかあの本を入手するように交渉しよう。高橋先生っていうのは、岡村昭彦さんとも直接ご交流があった方なので、なんとか交渉して手に入れようというところから始まったというふうに。私が浜松にいて当時、高橋先生が静岡にいらして何度かきてましたから、「あの記事はお前が書いたのか。だったらもし取れたらお前に教えてやる。」という話になりました。当然当時は関連地域部局の下に、今と違って知事部局の下にありましたから、本を買うとなると知事部局のほうに予算が請求されると。そうすると県庁のほうから静岡新聞のほうに話がおりたらしいと。静新が書くという風に言っているけれども、これはそもそもお前からとった話なんだから、静新に書くのストップしているからお前すぐに取材に来いというふうな話があって、それで私の記事と静新の記事が同着で同じ日に、静岡県立大学の蔵書になるのがほぼ確定したという、そういういきさつがあったと当時記憶しておりますし、先ほど記事上でも確認いたしました。以上です。

前坂氏：岡村さんは、民間のフリーランスとして研究の活動をやったような日本の中の研究者で考えた場合には、100年前の南方熊楠先生、彼の場合も世界中を回りまし

て、ロンドンの大英博物館で研究して膨大な資料を持って帰りました。その後柳田國男とか最近宮本常一さんですとかが評価されてますが、今この岡村さんの存在を考えると、戦後が生んだ最も大きなジャーナリストではないかと思います。彼は決してカメラマンではなく、カメラという手段を使ってインターナショナルに情報を伝達していくという、この手段として写真家になったんですが、彼の創作の秘密は、そのシャッターの前ですね、その研究方法、研究態度は、この岡村文庫を資産に研究していく中に入っているのではないかと、という気がいたします。岡村文庫に影響をうけるジャーナリスト、そういう枠を超えて、事実を確認する方法、それから社会がどういう方向に向かっているかというのを、いち早く予見する知能、方法論を実際に確認する、そういう秘密が岡村文庫にはある気がします。まだまだ話は尽きないんですが、これから岡村文庫のほうに見学に入っていこうと思います。どうも本日はありがとうございました。

司会：パネリストの皆様、本日は大変ありがとうございました。本日の講演会はこれで終わります、岡村文庫に今からご案内いたします。少しお時間がある方ございましたら、是非見て行っていただきたいと思います。また、その後パネラーの方とも交流会を予定しておりますので、よろしかったらお寄りいただきたいと思います。それでは担当の者がご案内いたしますので、どうぞ図書館の方に移動をお願いします。



「岡村文庫」にて。右から岡村昭彦の写真、岡村春彦氏、雅子氏。